



日本語力は言葉の問題だけに還元できるのか

堀池信夫

哲学・思想学系教授

前号の特集は「日本語力を考える」だった。

私が、試験やレポートで学生の文章能力が落ちてきたと感じたのは、古く20年以上以前のことである。そしてその頃の学生たちが、今は教壇に立つようになり、今度は最近の学生の日本語力を嘆いている。とすると最近の学生の文章力は、順番によってとんでもなく低下しているということになる。事実、最近の学生にはそうしたものが多くなっているように思われる。だいたい、私の若い頃は、最近の若者は文章が下手になったといわれたものだが、その前の世代も、多分その前の前の世代もそういわれていたのだろう。すると時代が降れば降るほどに言語能力は低下するという法則があるかに思われる。しかし実際の所、これは法則でも何でもない。明治以降の日本文化の趣向と深く関係することなのである。

言葉は生き物であるから、進歩か退歩かはともかく、時間の流れで変化してゆ

く。だが、だからといってすべてを言語の歴史的本質の分析・還元により、そのままに受け止め、柔軟に対応しようというだけではすまないような気もする。前号の特集の論文の多くは、現状分析と対処法を様々に説いていた。如上のような問題の解決を、早急に行う必要があると考えたからであろう。適切にしろ不適切にしろ、真摯な提案であったと思う。

問題は言語力（日本語力）が（特に最近急速に）低下しているのは、言語それ自体の問題に留まるものでなく、またそれゆえ対処法は重要ではあるが、オールマイティではないということである。紙数が尽きるので、簡単な指摘に留めるが、実は明治時代、森有礼以来、我が国の知識人層においては、日本語軽視のエートスが一つの文化的性格となっていた。そしてそうした文化的趣向がここ十数年の間に（情報手段の革命的展開によって）壊滅的なクラッシュとして現れてきているのではと考えられることである。つまり日本語問題は、より広く文化的問題として捉える視座が必要だと思われるのである。21世紀に入ってはっきりしてきた文学というジャンルの劇的な衰退と併せて、この問題はさらに議論が深められてよい問題であると思う。

（ほりいけのぶお 中国哲学）